

[平成 25 年度 博士学位論文要旨]

ヒンディー語の所有表現の研究

言語教育研究科 日本語教育学専攻 博士後期課程 今村 泰也

(論 文 要 旨)

本研究はヒンディー語（インド・ヨーロッパ語族インド語派）の所有表現（XはYを持っている：X=所有者，Y=所有物）を考察対象とし，複数の所有構文の併用と各構文に見られる文法現象を言語類型論的観点から考察したものである。

ヒンディー語には英語の *have* に相当する動詞がなく，所有は *be* に相当する存在動詞 *honaa* を用いて自動詞文で表される。その際，所有者 X は所有物 Y の属性あるいは Y との関係によって所格，属格，与格のいずれかを取り（格は後置詞や代名詞の格変化で表される），X *ke paas* Y *honaa* 「X の近くに Y がある」（所格を用いた所有構文），X *kaa* Y *honaa* 「X の Y がある」（属格を用いた所有構文），X *ko* Y *honaa* 「X に Y がある」（与格を用いた所有構文）のように表される（(1)-(3)はそれぞれの例）。

- (1) *ramesh=ke paas do kaarē hāi.* (分離可能所有)
ラメーシュ.M=GEN 近くに 二 車.F.PL ある.PRS.3PL
「ラメーシュは車を 2 台持っている（直訳：ラメーシュの近くに 2 台の車がある）」
- (2) *raam=kaa ek beTaa hai.* (分離不可能所有)
ラーム.M=GEN.M.SG 一 息子.M.SG ある.PRS.3SG
「ラームには息子が 1 人いる（直訳：ラームの 1 人の息子がある）」
- (3) *harek=ko rozgaar=kii chuuT hai.* (抽象物の所有)
各自=DAT 職業.M.SG=GEN.F 自由.F.SG ある.PRS.3SG
「万人が職業 [選択] の自由を有する（直訳：各自に職業の自由がある）」

これらの所有構文の使用条件は先行研究でほぼ明らかにされているが，本研究では Heine (1997a) の文法化理論と所有の類型に基づき，言語類型論の観点から分析と考察を行

った。具体的には第4章で存在動詞 *honaa* を用いた所有構文を考察し、各構文の統語的特徴と関与する所有概念を明らかにした。ここでは上記の構文に加え、*X mē Y honaa* 「X (の中) に Y がある」((4)) と先行研究で扱われていない *X ke haath mē Y honaa* 「X の手 (の中) に Y がある」((5)) を考察した。

- (4) *us=mē baRaa dhairy hai.* (内在的特性の所有)
 3SG=LOC 大きな 忍耐力.M.SG ある.PRS.3SG
 「彼はとても忍耐強い (直訳: 彼 (の中) に大きな忍耐力がある)」
- (5) *gvaalaa=ke haath=mē lambii laaThii hai.* (物理的所有)
 牛飼い.M.SG=GEN 手.M.SG=LOC 長い 棒.F.SG ある.PRS.3SG
 「牛飼いは長い棒を持っている (直訳: 牛飼いの手 (の中) に長い棒がある)」

第5章では英語の *have* に相当する動詞がないとされているヒンディー語にも一種の所有動詞があり (*rakhnaa* 「置く; 保つ」> 「持つ」), 他動詞の所有構文があることを示した ((6))。

- (6) *pratyek musalmaan apne jiiivan=mē ek baar haj*
 各々の イスラム教徒.M.SG REFL.GEN 生涯.M.SG=LOC 一回 メッカ巡礼
kar-ne=kii icchaa rakh-taa hai.
 する-INF.OBL=GEN.F 願望.F.SG 置く;保つ-IMP.F.M.SG AUX.PRS.3SG
 「イスラム教徒は皆、一生に一度メッカに巡礼する願望を持っている」

ヒンディー語の所有構文とそれが表す所有概念は表1のようにまとめられる。

表1 ヒンディー語の所有構文とそれが表す所有概念

Construction	Source Schema	Kind of possession						
		PHYS	TEMP	PERM	INAL	ABST	IN/I	IN/A
<i>ke paas - honaa</i>	Location	+	+	+	-	+/-	-	-
<i>kaa - honaa</i>	Genitive	-	-	-	+	+/-	+	-
<i>ko - honaa</i>	Goal	-	-	-	-	+	-	-
<i>mē - honaa</i>	Location	-	-	-	+/-	+/-	+	-
<i>haath mē - honaa</i>	Location	+	-	-	-	+/-	-	-
<i>rakhnaa</i>	Action	-	-	+/-	+/-	+	-	-

PHYS (物理的所有), TEMP (一時的所有), PERM (永続的所有), INAL (分離不可能所有),
ABST (抽象物所有), IN/I (無生物分離不可能所有), IN/A (無生物分離可能所有)

Heine (1997a) は抽象的な概念領域である所有は具体的な領域から派生し、また、所有はほかの文法カテゴリーへ発達することを論じている。本研究ではヒンディー語におけるそうした事例として所有からモダリティ (義務表現) への文法化 ((3)>(7)) を挙げ、考察を行った (第6章)。

- (7) ek din sab=ko mar-naa hai.
ある日;いつか 全員=DAT 死ぬ-INF.M.SG ある.PRS.3SG
「[諺] いつかは皆死ななければならない (直訳: いつか全員に死ぬことがある)」

本研究の重要な成果は以下の諸点である。

- (i) 本研究では Heine (1997a) が提案した 7 つの所有概念を用いてヒンディー語の所有構文を考察した。先行研究では X ke paas Y honaa (分離可能所有) / X kaa Y honaa (分離不可能所有) / X ko Y honaa (抽象物の所有) の 3 分類, あるいはこれに X mẽ Y honaa 「X (の中) に Y がある」 (内在的的特性の所有) を加えた 4 分類であった。しかし、実際の用例では 1 つの構文が複数の所有概念を表したり、ほかの構文との重なりがあったりとそれほどクリアカットなものではない。Heine (1997a) の所有概念を用いることによって従来の記述を精密化することができた。
- (ii) 先行研究で扱われていない X ke haath mẽ Y honaa 「X の手 (の中) に Y がある」を所有構文として考察した。また、英語の have に相当する動詞がないとされているヒンディー語にも一種の所有動詞があり、他動詞の所有構文があることを示した。
- (iii) 先行研究の用例はほとんどが作例で、所有物も典型的な例が多い。本研究では文学作品や新聞記事、Web 上の用例など、さまざまな実例をもとに各所有構文が表す所有概念を明らかにした。
- (iv) インフォーマント調査によって先行研究の記述や用例 (文字資料) を見ているだけではわからない構文間の意味の違いや用法を記述した。
- (v) ヒンディー語の所有構文を他言語の所有研究の知見や通言語的な傾向に照らし、ヒン

ディー語でも同様の言語現象が見られることを示した。例えば、所有構文における有生性や分離不可能性の関与、角田（2009）が提案した「所有傾斜」、Narrog（2012）の「モーダル所有構文」などである。

(vi) Heine（1997a）ではヨーロッパやアフリカの言語の事例は詳しく述べられているが、アジアの言語についてはあまり述べられていない。本研究は Heine（1997a）の理論的枠組みに基づいたアジア（インド）の言語の事例研究として類型論研究や対照研究に資するものである。

参考文献

- Heine, Bernd (1997a) *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Narrog, Heiko (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版：言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版.